場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

第142号
2020年5月

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行（運営委員長:島田幹夫、記録：安藤彰浩、編集：中川健史）
主宰：吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp

吉田千秋（主宰）から ＜記憶せよ　抗議せよ　そして生きのびよ＞

4月7日に、新型コロナウイリス感染防止のために、「特別措置法」に基づく「緊急事態宣言」が発令されました。そして、休校や、営業自粛、外出自粛など、さまざまな「要請」が、各県独自に出されました。

「パンデミック（感染爆発）」が宣言されて以来爆発的に増え、4月29日段階で世界の感染者は310万人、死者も21万人を越えました。この事態に関して、皆さんも多くの報道や言説を通して、様々なことを知り、様々な思い、考えを持たれたことでしょう。ボクもできるかぎり多くのことを知るように心がけ、いろんなことが分かってきました。

たとえば、「不要不急の外出は控えて'Stay home!'」と言われても、コーヒーを飲んで音楽を聴くような優雅な過ごし方ができず、生きていくために働きに出かけなければならない人たち。逆に、働かなければならないのに、仕事が激減し、奪われた人たち‥5月例会のテーマにしていた「フリーランス」の人や、日本社会の下支えをしている大勢の外国人労働者、そしていち早く路頭に放り出される非正規労働者の人たち。

さらに、この間に明らかになった様々な新たな差別と排斥にあっている人たちも‥感染の危機にさらされながら最先端で献身的に働いておられる医療関係者までが被害にあわれているという悲しい出来事も。

そういう人たちとともに、病弱な人、障がいのある人、介護の必要な人をはじめとした「社会的弱者」、そして子ども、学生。この人たちがどれだけの不安をかかえ、怯えながら日々過ごしておられることか。いま、ボクたちに必要なことは、この人たちの実状をもっと知り、思いを馳せる想像力と共感力を得ることなのではないでしょうか。

この間、多くの論者たち、映像、小説などから多くを教えられました。いちいち挙げませんが、その中で、あらためて「そうだ、そうなんだ！」と頷いたのは、敬愛する井上ひさしさんの言葉でした‥＜記憶せよ　抗議せよ　そして生きのびよ＞。

（せせらぎ街道:大蔵の滝）

これは、2000年8月3日に、広島平和記念資料館を訪れた際の記念サインです。添え書きに、これは「英国の物理学者の名言に、記憶せよという句を付け加えました」とあります。原爆という惨劇、戦争という惨劇、そしてペスト、コロナという惨劇、これらはたんなる自然現象ではない。人為がもたらしたものでもある複合事象です。だからこそ、それをもたらした権力、政治・社会体制に抗議しなければならない。でも、その惨禍に滅入り、何よりもまずへこたえることなく生き延び、この惨禍を記憶し、伝えなければならない。

井上ひさしさんには3度親しく話す機会を持ちましたが、そのたびに元気を頂きました。上記の文は、「人間には不幸の中から希望をつかむ能力がある」というメッセージにつながっています。これがいまボクの心の支えになっています。

さて、どうしたら希望をつかめるのか‥いっしょに考え行動しましょう。

（2020.5.1）
（主宰:吉田千秋）

【お知らせとお願い】

＜今後の例会について＞

・５月以降の例会については、当分の間休会とします。
・事態の進展状況をみて、開催可能と判断できればお知らせします。

＜「哲学カフェ通信」は継続して刊行・掲載します＞

〇６月初旬に刊行するNo.143　は、「コロナ問題をテツガクする」の特集号を組みます。記念行事の講演者にも特別寄稿をお願いするほか、従来の枠を越えて、多くの皆さんからの投稿を期待します。投稿が多ければ、特集の継続の形で編集します。
〇投稿は以下のようにお願いします。友人・知人などにも投稿要請願います。
テーマは自由ですが、字数は400字ほど、5月２４日(日)までに。記名は自由ですが、投稿の際には本名・連絡先お願いします。なお、編集のため、多少の改変は了解願います。
〇送信先　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp　（吉田千秋）
〇問合せは、上記他、携帯も利用願います・・090-7917-9602

＜皆さんからの意見、たよりなど＞

＊4月例会を休止しましたので、今回も例会の記録や感想は掲載できません。
しかし、前回同様、いろいろなたより、意見を寄せて頂きましたので、掲載します。

〇ご無沙汰です。コロナ禍が広がって、田舎でも人が集まる活動はみな”自粛”に。そんな中、私は今、終活と、晴耕散歩雨読もの作りの暮らしをしています。その一端を少々ご紹介しますね。

・万葉の　昔は遊女も　防人も
　　詠んだという歌　吾もしてみむ
・ここかしこ　桜みごとに　満開に
　　伊自良堤は　コロナにも負けじ
・散る桜　花ふぶき舞う　トンネルの
　　今朝の散歩の　美しきかな
・土手の道　紫色の　小すみれが
　　ここにもそこにも　あそこにも
　　こんなに見つけて　感激しきり
・孫たちに　幸多き世を　残したし
　　願いおりしも　できぬ身を詫ぶ

（あ）

〇ご無沙汰しております。いま、仙台に居ます。当時、住んでいた名古屋から例会へ通っていたのは2010～12年ごろ、ちょうど、東日本大震災の前後のころでした。とはいっても、「後」の方は未だ続いていますね。それから、大学院博士課程への進学や就職で、八王子、相模原と、今春から仙台に来ています。
例会へは長らく参加できていませんが、いつも通信で楽しそうな様子をうかがっております。
　この4月からの職場は保育士、幼稚園教諭養成の現場です。この状況で、授業開始は先送りとなり学生とは十分な顔合わせができずにもどかしいです。しかし、学生たちの実習はどうするか、普通に考えれば「無謀だろ？」と思うところですが。そうはなりません。社会全体、もう少し冷静さとゆとりがほしいものです。
　コロナをめぐって、大学に限らず学校関係者から、オンライン授業、ウェブ授業のハウツー情報が、「コロナ対策」として発信される機会が増えているのが気になるところです。まあ、淡々と講義をするだけならそれでいいのでしょうが、どうも話す相手が見えないなかでは、もっと根本から考えなければならないような気がしています。　（山沢智樹）

〇いつも哲学カフェ情報ありがとうございます。思わぬ事態で例会もままならぬことになりましたね。世界史・日本史・文学などで、疫病が流行して世の中の状況が変わったということを知ってはいまし

たが、まさか自分がそのことに現実に遭遇するとは！

私は、表現は良くないですが、自然界の生態系の中で人類が増大し、地球を異常な状態にしている事に対する、自然界の中での淘汰・間引きにあたるのでないかと思ってます。

お互い高齢者なので気をつけて、何とか間引きされないように生き延びましょう。私は日々の予定が無くなってから、以前より元気になった気がします。よく寝る・食べる・庭仕事、片付けなどで体を動かす・読書等でまともになって来たのかと思うくらいです。

次世代のパラグラムが構築されるまで、我々のいなくなった後、数代の人々のご苦労は大変であろうと察します。　(KOZUE)

○コロナのことで、私の属する社会が私にとって、いかに私自身を支えていたものであったかということを、物と心の両方の面において、考えさせられます。食べていくことという金銭的な条件と、生きていくという健康の条件とが、自然には与えられていないという反省を私はもたらされました。

私自身に、想像力が必要であると思っています。その事を言う私、というものが想像力の危機にあるということを、考えます。

私が、いかなるものであったかということを、考え直さずにはいられません。私は、改めて、私自身をこれから考えていかねばならないということや、また日々緊張感を持って生きていこうということを、感じます。　(E)

○いよいよ、一日置きの在宅勤務が始まりますが、お給料をいただける職に就けたことに感謝しています。職場では初の感染者にならないように、みんな毎日ビクビクして過ごしてます。一人ひとりのあり方が問われているように思います。

自宅でどう有意義に過ごせば良いかわからずにいます。私が出来ることはないだろうか？　私はどう人と繋がっていけばよいのだろうか？　私はどんな未来を創りたいのだろうか？　考えれず、迷子の迷子の子猫ちゃんです。

けれど悲観的ではありません。じっと夜が空けるのを待っています。忍耐。我先にと人を押しよけてまで買い物する人にはなりたくない、節度ある人でありたい。けれど誰かの力にもなれない。自分の事しか考えられない私。ただただ耐える努力をしています。　(子猫)

○＜コロナと5Gと小学 3 年から英語＞

過去にヨーロッパでは、ペストの流行が上下水道の社会インフラの整備を促進させた。コロナが5Gインフラの整備を促進させるだろう。5Gの負の側面、環境汚染を早く周知して安心安全な整備・運用を提唱させる必要がある。小学 3 年からの英語教育は彼らが独立自由人になるときに、日本人の意識改革が始まるだろう。為政者の望まない新日本人が誕生するだろう。俺はそれを見る事が出来ればうれしく思うだろう。健康寿命がそこまである事をのぞむ。

英語の文法と日本語の文法は違う。支配者の文法と奴隷の文法の違い。混在する言葉の文化の中で、横の社会が芽生え定着することを願う。

コロナ不況と関連があるのか　鉄道の人身事故が多発している。コロナの死者の中にも、コロナ不況で生活の基盤が崩壊して自死に追い込まれた人もいるのでは。人・命への迅速な救済投資を望む。

(こうこうぶん　わへい)

○社会がどういうふうにどこから壊れて行くのか、というのを毎日、見ている感じがします。どこの社会の壊れ方にも共通している点があって、「弱い」ところから壊れて行く。その現実を見ています。

私たちの社会の壊れ方を通して、私たちの社会の実体が剥き出しになって晒されています。防護服もマスクも人工呼吸器も海外に依存していたことなど、私は全然知りませんでした。いつのまにこれほどインバウンドに寄りかかっていたのか、そのことも、空っぽになって、清清しいほどに人がいない京都市内を歩いて、痛感しています。本当に、私たちの社会はからっぽになっていたんだなって。

壊れて行く過程の中で生まれつつあるものもあるはずですが、まだ、見えない。出来れば中国のような監視国家ではない方向にしたいですが。

(MIEKO)

○　私は、日本語学校の非常勤講師をしていたが、新入生入らず、失業した。そこで、4月から、技能訓練校で仕事をするよう、無理矢理入れてもらった。

技能訓練校は、1部屋に3段ベッドが何台も置かれた寮生活。会社で働く前の1ヶ月間で、日本語、日本の生活を教える。ほとんどが東南アジアの田舎からの出稼ぎ者。ウィルスを持ち込む可能性もある。

3月31日、夫が37.8の熱を出した。我が家には、3月20日にフィリピンから帰国した娘がいる。もしやコロナでは。そこで、家族会議。子ども達、夫は、仕事を休むよう詰め寄る。私は、技能訓練校で、自分だけ仕事を休むことに後ろめたさがあり、無理矢理仕事をもらった身の上なので、私は心の中でロックダウンを祈って待った。

子どもは言う、「お母さんは、お上の指示がないと、行動できないの。お母さんが意見を言い、態度を決める事で、同僚も考え会社も考える。残業している人が、長時間労働を作っているのと同じなんだからね。」　結局、クビ覚悟で仕事を休ませてもらう事になった。翌日、夫は、平熱に戻った。

医療や介護の現場にいる人達には本当に頭が下がる。今、我が家にできることは、外出を控えコロナに感染しない事だけだ、と思った。　（かこちゃん）

○＜コロナを拡げるブラック企業＞

「3月から1日も休日がない」と話す知り合いがいます。彼は今ブラック企業で働いています。人間は休息をとらないと免疫力が下がり病気にかかりやすくなるので、新型コロナにも感染しやすくなってしまいます。それを考えると、社員に休みを与えなかったり、しこたま残業をさせて睡眠時間を削るブラック企業は、働く人の免疫を下げてコロナを蔓延させるのに一役買っている、と言えます。

コロナを防ぐために手洗い、外出自粛といった「外側のバリア」ももちろん大切なことですが、栄養を取りたっぷり寝るといった「内側のバリア」も、ウイルスから身を守る重要な手段であります。社員の健康を守ることは、社会の伝染病を防ぐことでもあるのではないかと思いました。　（カモノハシタニ）

○岐大病院で感染者！　その医師の陽性可能性を4月3日には把握しながら、岐大は同日、県知事自粛令と構成員安全確保を理由にロックアウトを突如宣言。しかし、翌4日にHPの文書を「差し替え」、「構成員とクラスターの行動範囲が重なる」からと強弁。ところで、懇親会等は原則禁止だったはずが、岐大生協食堂のハラル推奨フード試食会は何故か敢行。学長も出席。岐大生協は同時期にお粗末な感染症対策でイベントを実施。以上根拠ある話です。

（KOKI）

○私は旋回の「通信」に、「フラワーデモに行き、チカン行為を受けた体験を初めて語った」ということを書いた。フラワーデモという運動がなかったら、一生話すことはなく人生を閉じていったと思う。人前で体験を話したこと、そのことを文章にしたことによって、私には次なる課題が待ち受けているのだろう。もんもんとした状態が続いている。「フラワーデモからの旅」とでもいうのでしょうか。哲学カフェのみなさん、ときどきつきあってくださいね。（尚）

○＜格差がコロナ感染を深刻にしている＞

最近のskype英会話でのやりとり中で、「私の国では、コロナ感染者が十数人でも、もう病院の対応能力を超えてしまう」と、諦め顔で話してくれた講師が多かったことに、心が痛んだ。アフリカ・中南米・アジア・東欧などでは、3月の早い段階でロックダウン（地域封鎖）を宣言した国が続出。私としてはコロナ禍を機に強権政治への傾斜を危惧していたが、どこでも「受け入れる以外にない」との意見が多数派のようだった。

そこで、「失業者とか日銭を稼いで暮らしを立てているスラムの住民などはどうすればいいの？」と少し突っ込んで聞いてみた。「そういう人の多くは田舎から出てきた人だから、これを機に帰ってもらう」（インド）、「政府は企業に解雇禁止令を出すとともに、生活困窮者に支援金を給付している」（ベネズエラ）、「お米などの食料や日用品を詰めた救援袋を配布し始めた」（フィリピン）等々の対策がとられていることも分かった。だが、インドのムンバイやブラジルのサンパウロでは、「ロックダウン反対、コロナより仕事ができないことの方が怖い」と抗議行動に起こし、一部は暴徒化したとの報道もあった。

この問題は実に悩ましい。国際的にも国内的にも、格差問題が感染症を克服する上でも決定的な阻害要因になっていることを我々に突き付けている。近々インド政府は、「厳しい規制の一部を一時緩和し、困窮者が収入を得る機会を期間限定で認め

る施策に出る」とのことだが、感染の再流行にならねばと祈るばかりだ。（フィリピン・ウオッチャー）

○最近、ますますシンコロナがシンゴジラのように自分自身の形態や性質を変異させながら、世界経済や日常生活を破壊しまくっているように感じます。そんな状況の中、悪いことばかりじゃなくて、シンコロナによって良くなったと思うことを二つ書きます‥自分の主観ですが。

一つ目はオリンピックが、漫画AKIRAで描かれたのと同じ経緯をたどって中止になりそうなことです。

二つ目は小学校から大学まで、多くの学校が休校しており、大学によっては九月末までオンライン授業で対応というところもあります。このことは、学校システムに馴染めない不登校状態の子や、いじめで悩んでいたり、自殺を考えている子にとっては素晴らしいことじゃないかと思いますし、今後登校しなくていいオンライン授業の比率が高くなれば、明治以降の国民国家に役に立つ兵隊や労働者を生産するために作られた学校、学級システムの大転換になるかもしれません。また、スクールカーストなどという胸くそ悪い現象も消滅するでしょう。大学入試制度云々より社会構造に与える影響は大きくないでしょうか。

まだまだシンコロナによる社会構造の変化はたくさん出てくると思いますが、その中で自分はどうするか、パニックに陥ることなく冷静に考え、観察していきたいと思っています。（たなか）

○＜学校の「臨時休業」とは＞

2月27日の会議で臨時休業の要請をしたいと発言。これを機に一気に全国で広まる親御さんたちの悲しみの声が広まりました。「これを聞いて、おもわず机に伏してしまった。」というような声が新聞の投書欄に載り、子育て中の親御さんたちの心を推し量るのに余りあるものでした。

今回のCOVID－19による感染の状態は地域により異なり、急な「要請」です。子どもさんをどこに預けるのか、家庭での話もする暇なく、とにかく、突然に学校などが休みになることってあるのか、と唖然とします。

さて、学校の休業は「学校安全保健法」で公立の学校は設置者つまり、都道府県や市町村の教育委員会が判断するものです。法治国家ですから、この間の様々な健康や福祉を増進する仕組みをそれなりに進めてきましたが、それを「根こそぎ」に近い状態で、金のかからないやり方で進めたのです。まだまだ、対応の余地はありました。（野口）

○当初から2020年度予算には、「新型コロナ関連」は一切含まれていなかった。野党からは前例には無いが、通常国会で「新型コロナ関連」の追加を要求して、今回は自民党内部からも賛同の動きがあったが、結局は財務省と内閣官房に屈して実現できなかった。これが安倍政権の対応の後手・誤手の源である。またメデイアも野党も、この点を大きく取り上げないのが大変残念である。

また先日、朝日新聞の原真人編集委員がテレビで、「ドイツでは3日間で休業補償が振り込まれたが、日本はマイナンバー制度の不備で実現できず」と発言。これはちょっとおかしいと思う。原委員は今までマイナンバー制度にどの様な姿勢で対応して来たのか。政府と国民にどう説明したのか。立場上、今になってのこの発言はとうてい許されない。

これと同様なことが「哲学カフェ」の中でもありうる。参加者の発する意見とその方自身の行動の矛盾点やフェークニュースの有無の証明など重要な課題である。（井口）

○産業の空洞化といわれて久しい。危うさを感じながらも何となく流されてきた。「大量消費、消費は美徳」という言葉も違和感を覚えてはいた。どこまでも続くはずのない経済成長を求めて、地球の隅々にまで企業は手を伸ばし、開発の名の元に自然を支配下においてきた。そんな半世紀ほどの歩みに、「待った！」をかけられたような、新型コロナウイルスの出現。

緊急非常事態宣言による効果、ワクチン・治療薬の開発への期待。終息の日はいつか？コロナは後世に、どんな教訓をもたらすであろう。

忘れてはならないことは、今回のことを憲法改正の口実にさせてはならない。真実を見極める目と、主権者としての自覚。それが信頼できる政府をつくる。こんな鬱屈した私たちだが、空はどこまでも青く、ハナミズキは日に日に色を出し、アジサイは蕾を、山々は新緑に輝きを増す初夏が来た。

（ひらつか）

＜びっくりWORLDぎふ No.6＞

「よー、地芝居日本一！　続き」

関ヶ原の合戦から100年、赤穂浪士の仇討がおこり、続いて富士山噴火・宝永山出現という自然現象・大災害の発生もありました。それに加えて元禄期までの経済成長が一段落し、「米価安・物価高」という経済状況のもと幕府財政や多くの藩財政は悪化し、新参派と譜代派との対立が顕著になってきます。そういうなか将軍になったのは、初の徳川御三家からの出身、紀州藩の徳川吉宗でした。享保の改革が始まります。そのひとつに奢侈の厳禁、風俗統制、出版統制などの倹約令がだされ、美濃の村々では地芝居を巡って代官や領主と百姓との綱引きが始まります。

時は享保8年（1723年）苗木藩領（中津川市やその周辺）の村々に、お触れが廻る。「村方祭礼之儀、操・狂言並びに踊等之儀ハ今年より一切仕間敷候」。つまり、「村の祭礼のときに操（くぐり、人形浄瑠璃）や狂言（歌舞伎）、踊り（歌舞伎）を今年からは一切行ってはいけない」というものです。ということは、すでに東濃の村々では、百姓たちが舞台や衣裳・人形を持ち、人形浄瑠璃や歌舞伎を演じていたということです。触れをだしたあと、藩は各村の祭礼時の踊りなどの調査を行い、各村で行われている芸能（獅子舞・神楽・花火・花馬・踊・操・狂言芝居）を禁止します。その後1844年までに4回、禁止の触をだしています。村々では禁止令がだされても遵守されることはなく、処罰を免れるように工夫を凝らし、美濃の農村芸能はさらなる興隆に突き進んでいくのです。

美濃での農村歌舞伎・操の始まりは可児郡瀬田村で延宝４年（1676年）太元宮祭礼に請「狂言尽」。請は招く、狂言尽は歌舞伎、すなわち都市の専門家集団を招いて歌舞伎を奉納したのです。瀬田村は花フェスタがあるあたりの村で、中山道伏見宿に近く村の上組が尾張藩領、中組が幕領、下組が旗本妻木氏領でした。（幕府の美濃の支配政策として、鉱山や山・森林、木曽三川沿いは幕領に、次に益をえられる地域は尾張藩領他に、残りを大垣・加納・郡上・・・の９藩と旗本71人の所領であった。ビックリ！）　瀬田村では領主が違っていても太元宮祭礼と奉納芸能は共同して行われ、当然その費用も村でまかないます。そして何度も招くことにより、とうとう百姓自らが演ずるようになっていくのです。

3、400年も前の庄屋たちのこれらの記録簿や日記が残されていることにびっくりします。その中に、現代を生きている私たちにとって考えたいことや想像したいことが多く含まれ、当時の人々の姿から大きな励ましをもらっています。私はその古文書を読めるようになりたいと思っています。　　（佐藤尚子）

アルベール・カミュ著　『ペスト』（新潮文庫）

最近毎日、新型コロナの感染者数と死亡者数が気になるのは、私だけだろうか。コロナウィルスは突然やってきた。だれがどこで感染するかわからない。まだワクチンも見つからないのだから、感染すれば呼吸困難になりその約2パーセントは致死する。症状が現れるまでの潜伏期間が2週間ほどあり、だれが感染しているのかわからない。感染を封じ込めるためには、緊急事態宣言しかない。

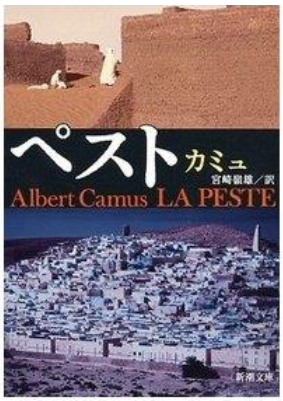
出口の見えない封じ込め、この本『ペスト』は、疫病ペストのため隔離されたアルジェリアのオラン市を舞台に、この町にいたいろいろな立場の人、医師、記者、青年、役人、神父などがどう生きたかを通して、カミュは私たちに、生きるということ、自由、愛、神、戦争、ヒロイズム、死など哲学的なテーマを次々と実存主義的な立場から問いかける。

この本は読めば読むほど面白くなる。最初読んだ時は、少し難しかった。それは、一人の主人公の生涯

を描くようなストーリーではなく、ペスト渦中の群像劇だからである。その上、喜怒哀楽の感情に訴える物語ではなく、抑えられた抽象的な理念が深く重い悲しみの具体化によって表現されているからである。

しかしながら彼の文章には魅せられる。端々に彼自身の誠実さが伝わってくるからだ。地中海の太陽、深い母の愛、貧困のためにいろんな仕事に携わり得た共感能力などが育む、率直で透明な優しさのある表現であふれている。

カミュはこの本を1941年に着手し、1946年に書きあげている。ペストはドイツ軍に占領されたフランスの隠喩だと分かる。見えない敵、新型コロナに対する各国の対応は様々だが、どこも議会よりも即断できるリーダーを人々は好むようにみえる。感染防止に一役を買ったIT社会は、安全と同時に自由をも奪う。カミュの時代には考えられなかった超監視社会にわたしたちは生きている。実存主義は古く、ポストモダンの中で新たな政治の在り方を探さなくてはならない。



この一冊は、コロナ危機の後にやってくる不条理社会への予感と心構えをも考えさせる。

（かこちゃん）

＜世界一周貧乏旅　その10＞「ハローマイフレンド:番外編

イラン編まさかの3本目です。せっかくの濃い人々との出会いだったので、ランキング形式で3つ紹介させていただきます。

第3位、ジョージクルーニー似の空港職員のおじさん。

イラン到着後一番初めに親切にしてもらったこちらの方。僕がイミグレーションでビザ手続きにまごついていると、「こっちに来い、やってやる」と書類記入や申請など何から何まで済まして、僕は紙を出すだけで済んだという日。それにしてもダンディな人でした。イランで出会った顔がかっこいい人ランキングならダントツの1位です。

第2位、家族経営のレストランで出会ったハスティ（10歳）。

ほぼ英語が通じない「クラシックレストラン」で出会ったハスティという女の子。お客さんが僕以外いないのもあって、物珍しさから家族全員が僕に話しかけにくる、なんて状況でした。その家族の一人のハスティになぜだか気に入られ、”I Love You”とつたなく書かれたラブレターをもらったりしました。しかし貧乏旅で心が擦れてしまった僕は、「日本人だからお金持ってるって思われてるんじゃないか‥」などと邪推が止まらないのでした。

第1位、大人びたイランの青年達。

ある日僕は、乗りたいバスの停留所を探してうろうろとさまよっていました。すると、「どうした？」と

体格のいい30代中盤くらいのイラン人男性2人に話しかけられ、僕が事情を説明すると、親切に一緒になって探してくれたのでした。しかしバス停は見つからず、「もう送ってやるよ、乗りな」と、彼らのガールフレンドが乗った自家用車で送ってくれることに。

車内で色々と話していると年齢の話題になり、「ところで君たちは何歳なの？」と僕が聞くと、まさかの「22歳だ」という答えが返ってきました。「ええ！うそでしょ？？」と僕は驚き、正直彼らの大人びた見た目というか老けているというか、うーんたぶん、30歳半ばで家庭持ちかなー、などと思っていたくらいなので、まさかマイナス10歳も差があるとは思いもしませんでした。

写真はその親切な22歳達と撮った1枚、今見てもやっぱり老けて‥いや、大人っぽいなぁ。

（カモノハシタニ）

2020年前半 哲学カフェ、第24期の予定

場所 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」

例会は19:00～21:00です。

第139回例会 1月9日（木）	**「激動の世界、新年の展望を語りあう」（＝新年会も）** ＊昨年に続いて、今年も激動する世界・日本、これにどう向き合うのか。 ＊平穏無事に行きそうもない中、飲食物を持ちより、真剣かつ楽しく語り合う場に。 ⇒開始時間を6:30にします。酒類はなし。よろしく参集願います。 終了しました
第140回例会 2月13日（木）	**「100兆円を越える国家予算。収支とも大問題では？」** ＊今年の国家予算は超大型予算。税収入を甘く見積もり、またもや赤字国債増。 ＊支出でも大企業有利な政策目白押し。軍事費最高、国民生活はひっ迫。いいのか？ 終了しました
第141回例会 3月12日（木）	**「近年相次ぐ「自然」災害、備えは大丈夫か？」** ＊近年、地震のみならず、台風による河川決壊、浸水、死傷者続出、避難 ＊これは「自然災害」ではなく、「人災」ではないか。これにどう対処するのか 中止しました
第142回例会 4月9日（木）	**「大学入試はどうあってはならないのか？」** ＊来年度実施予定の「大学入試改革」は、文科省の不手際、批判続出でご破算に。 ＊大学入試のあり方を、あらためて根本から考えなければならないのではないか。 中止しました
第143回例会 5月14日（木）	**「急増するフリーランス、外国人労働者。どうなるの？」** ＊混迷続きの外国人労働者受け入れ問題にくわえて、新たに浮上した労働問題。 ＊「労働者」ではなく、個人自由契約のフリーランサー。その問題点を探る。 中止します
第144回例会 6月11日（木）	**「あらためて家族のいまと、その行く末は？」** ＊「万引き家族」で示されたように、日本でも、家族・家族観はかなり多様化した。 ＊でも、いまだ「家族」主義に拘泥し、個々人の自立を阻むものになっていないか。
第145回例会 7月4日or12日	**創立12周年記念行事** ＊昨年は、「人口減少化社会をどうとらえ、どう備えるのか？」で、シンポ開催。 ＊今年はどうするか？　テーマ、講師など自由に、早めに意見を寄せて下さい

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願いします。 口座記号・口座番号 00810 1 142912
加入者名　哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫
「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中！！ http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

わいわいがやがや アラカルト

★私たちは今、地球人の存亡にかかわる未曾有の危機に直面している。目に見えない敵、「新型コロナウイルス」との戦いである。この戦いで人類は勝利しなければならない。

★しかし、この場合の「勝利」とは一体どんなものかをよく考えてみる必要がある。たとえ現代の科学・医療技術を結集することによって、早晩「コロナパンデミック」を鎮圧することができたとしても、である

★毎日世界中の「コロナ蔓延状況」が新聞・テレビのみならず、いろいろなネットワークで報道される事はありがたいが、その信憑性には注意する必要がある。特に、政権政府の情報や巷のデマ情報に注意が必要である。

★グローバルにせよ、ローカルにせよ、今喫緊の国民的課題は何か。国民のリーダーであるべき政府、「責任主体」である政府が、どんな視点で、何を根拠に、どのような見通しをもって、何を実行しようとしているのかを、しっかり見極める必要がある。

★これまでの安倍政権の対応を見ていると、唐突で無責任な「学校休校宣言」、各世帯への「マスク2枚支給宣言」、後手後手の「緊急事態宣言」と「国民の行動自粛の呼び掛け」などは、場あたり式で、国家的・責任あるリーダーの言動とは思えない、と言われている。

★なぜならば、初期段階での感染地域の事実確認と分析力の欠如の結果、徹底した蔓延防止措置が取られていなかったことは、専門家の間でも批判されているからである。「新型コロナを制圧した」隣国や彼の国とは大違いである。

★先行きの見通しも不透明のまま、「国民一人当たり10万円支給」に騙されてはいけない。「騙す方も悪いが、騙される方も悪い」と言う、元映画監督、伊丹万作さんの言葉を思い出した。　（島田幹夫）